

## 第85回 経営協議会 議事要録

日 時 令和5年6月22日(木) 13時30分～15時5分

場 所 大学本部棟第二会議室 及び オンライン

委 員 日比野克彦 学長【議長】、迫 昭嘉 理事・副学長(教育担当)、  
清水泰博 理事・副学長(研究担当)、  
大場 武 理事(総務・財務・施設担当)・事務局長、  
中村政人 副学長(大学改革・渉外担当)、  
佐野 靖 副学長(社会連携担当)、  
赤羽真紀子 委員、岡田武史 委員、高橋陽子 委員、二宮雅也 委員、  
御立尚資 委員、湯浅真奈美 委員、吉本光宏 委員

陪 席 上田良一 監事、浜田健一郎 監事、麻生和子 理事、国谷裕子 理事、  
岡本美津子 副学長(デジタル推進担当)、  
光井 渉 美術学部長、杉本和寛 音楽学部長、  
桐山孝司 大学院映像研究科長、熊倉純子 大学院国際芸術創造研究科長、  
黒川廣子 大学美術館長、大森晋輔 附属図書館長  
河野文昭 演奏芸術センター長

欠 席 今村有策 副学長(国際連携担当)【陪席】、  
箭内道彦 学長特命(大学改革・ブランディング戦略担当)【陪席】

### 議題

1. 令和4年度財務諸表(案)について  
議長から標記のことについて提案があり、審議の結果、原案どおり承認された。
2. 令和4年度資金運用実績報告及び令和5年度資金運用計画について  
議長から標記のことについて提案があり、審議の結果、原案どおり承認された。  
金利変動については、リスクを取った資金運用計画である旨を認識した上で、その  
リスクを分かりやすく整理することとなった。
3. 東京藝術大学職員就業規則の一部を改正する規則等の制定について(案)  
議長から標記のことについて提案があり、審議の結果、原案どおり承認された。

### 報告及び連絡事項

1. 令和4年度光熱費の実績について  
標記のことについて、大場理事から資料に基づき報告があった。
2. 第3期中期目標期間に係る業務の実績に関する評価結果について  
標記のことについて、大場理事から資料に基づき報告があった。
3. 本学の取組について  
議長から、芸術文化における本学の近況について報告があった。  
(本学の取り組み)  
・2023/4/5 令和5年度入学式-共に創る入学式ワークショップ-

- ・ 2023/4/7 堺屋コレクション展-新入生歓迎特別公開-
- ・ 2023/5/19 東京藝大を中心に世界の7芸術大学「A7」が共同声明を発表
- ・ 2023/5/26-28 第69回 五芸祭-re:stART-
- ・ 2023/6/12- 館内選書ツアー2023~藝大生が図書館にいたる本を選ぶ2週間
- ・ 2023/6/17 SDGs×ARTs Geidai 大学の世界展開力強化事業 学生作品展
- ・ 2023/6/17 台東区コレクション展-
- ・ 2023/6/17 日本画第二研究室 素描展

## 懇談事項

### 1. 芸術による社会的インパクトの評価手法等について

吉本委員から、資料に基づき提言があった。

#### (その他の意見等)

- 社会的インパクトの評価において数値化するというのは難しいものである。ESG関連で、SOMPOホールディングスでは「インドネシアでの交通安全プロジェクト」を行い、多様な主体が協働で社会的課題の解決を目指すアプローチである「コレクティブ・インパクト」を測定・評価する試みの一つとして使っている。社会的価値の定量把握にも取り組み、事業の有効性についても確認するという例がある。
- 企業が行うESG投資の指標の一つに文化芸術が入っていいのではないか。例えば、GPIF(年金積立金管理運用独立行政法人)は200兆円程度を運用しており、「ESG指数」に基づいた株式投資も行っている。このようなESG指数の中に文化芸術の指標が入っていけば、大きく変わるであろう
- 評価の数値化では、全てを網羅することはできない。数値化することで非常に限定的になってしまう所と、もっと数値化できない全体として広く捉える所と二つが必要である。“限定的な部分だがミニマムでもこれだけの効果がある”等と説明しつつ、数値化しづらい将来に向かっての価値等について説明するといったのではないか。GDPだけでは計れない経済的価値があることを訴えた方がいい。
- ブリティッシュ・カウンシルでは多様な価値をリサーチとエバリュエーションに分け、他国の文化背景も照らし、効果検証の在り方や文化交流の価値を検証している。藝大においても、効果検証そのものを模索する方法と、藝大自体の価値を検証するものと分けて考えるといいのではないか。
- Creative Industries Policy & Evidence Centre (PEC) では、文化芸術分野の社会的インパクトだけではなく創造産業全般をカバーして評価しており、藝大も大学としての立場で主導していったらどうか。
- 文化芸術と、現在のビジネスというのは時間軸が異なる。ビジネスは予算の都合で、単年度で捉えられてしまうが、文化芸術はもっと長い。
- 評価においては何のためという目的が重視されるが、芸術の場合、存在そのものに存在価値を見いだす。数値化して評価しようとする一方で、問題点をあぶり出して議論することに価値がある。哲学的な問いかけがアートの本質なのではないか。
- 以前は企業から資金援助をもらうためにプロジェクトをやっていたが、今はESG投資等の背景もあり、企業側が変ってきている。プロジェクトは、地域の人たちが自然とその土地に意味を見だし、地域に誇りを持ち、自発的にウェルビーイングを実施していく動きへと繋がっている。それこそ芸術の力であり、プロジェクトの本質的な価値であろう。
- 評価するとき、例えば社会貢献活動の目的が何かを明確に定めないと、調査をしないと求めている効果を導き出せない。また、誰に説明するかが定まっていなくて迷走してしまう。

以上